

優秀賞

いじめ、差別のない

世界を作るために

八尾市立八尾中学校 三年 蘆田 あした 明也 ともや

僕には三歳違いの兄がいる。兄は一年中、真夏でも長袖を着ている。それは、体の傷を隠すためだ。兄は生まれつき肌が弱く、肌のかゆみのために体を引っかいては傷になり、また治ってくるとかゆくなり、そして引っかく、というような事を繰り返していた。そうやって長年の間にできてしまった傷は、硬く盛り上がってしまったている。

兄は小学校に入学してからすぐ、いじめにあっていたようだ。あだ名が初めは「ブツブツ」から「ブツブジュース」、さらに「いぼガエル」から「カエル」というように、一聞すれば何の事を言っているのか分からない、いじめだと判断しづらい言葉を使い、からかわれていたのだという。

ある日、兄とその友達、そして他の大勢の子ども

達が外で遊んでいた。そんな時、ひとりの幼い子が僕の母に、

「なんであのお兄ちゃん、カエルって呼ばれてるの？」と聞いた。大人達は不思議そうな顔をしていた。しかし、その場は確かにその言葉により、一瞬にして凍りついた。そこで遊んでいた子ども達は全員その言葉の意味を理解していたのだ。そして母もその意味を知っていた。そこで母はその子に説明をし、「言わないであげてね。」

と言っていた。他の大人達は皆聞こえないふりをしていたそうだ。僕はその時の一瞬の静けさだけは覚えていた。だが、その時の事は、はっきりと分かっていたいなかった。

それから年月が過ぎ、兄弟げんかをする事が増えた。僕はあまりに腹が立ったので、つい、

「ブツブツ、カエル。」

と兄に言ってしまったことがあった。その瞬間「しまった」と思った。「一番言っただけいけない事を、心に傷を負わせてしまうような残酷な言葉を投げつけてしまった」と思ったと同時に、兄が見たこともないぐらい激怒していた。そしてその後、僕は母に

呼び出され、

「そういう事を言うのは反則。凶器で心をいためて
かけているねんで。」

と言っでいじめについて話し始めた。僕はあの時の
静けさの意味、そして聞こえないふりをしていた人
達の行動の意味についてこの時初めて理解した。そ
して、「なんて言葉を浴びせてしまったんだ。僕は
とんでもない事をした。」と思い、本当に反省した。
それからというもの、僕は兄に対してそんな言葉は
一切言っでいない。どんな大げんかになっても絶対
に言わないと心に誓っでいる。

いじめ、差別には直接的なものと間接的なものがある。知らなかつたこと、見ていなかつたことにするということもまた、いじめ、差別なのだ。間接的な差別、いじめは、している人に自覚がないことが多い。しかし、されてる方は直接的なものと同様に、心に深い傷を負い、痛みを覚えてるのだ。兄は今までそういう苦い経験を幾度となくし、今では肌を隠して出歩くようになってしまった。

僕は、体や心になんらかの不自由がある人は人と少し違う所を持つでいるだけで、その人の個性とし

て考えるべきだと思ふ。変に同情したり無視したりするのでもまた、その人を苦しめてるのかもしれないということ覚えていてほしい。そして皆が互いに目をそらさずにきちんと向き合ひ、対等に話ができる人間関係を築いていきたい。そうしていくことで差別、いじめのない世界を作れると信じている。そして、いつの日にか兄もまた半袖を着て、堂々と外へ出ていける、そんな日が来ることを心の底から願っでいる。